# どうする？頼朝！

2022/08
横浜歴史研究会
真野信治

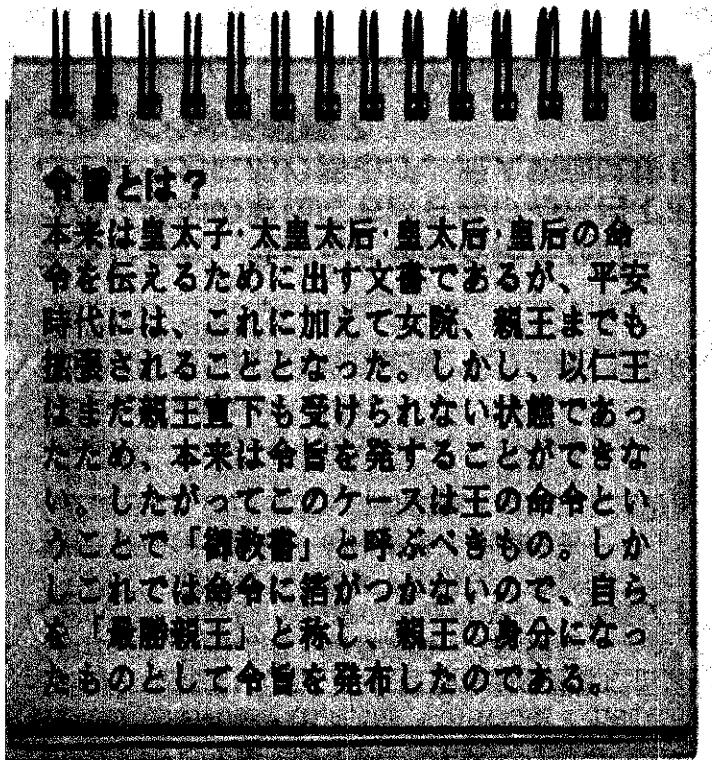
***実は、源頼朝の挙兵は行き当たりばったりだった！？***
***頼朝と坂東武士の本当の関係は？***

平清盛坐像（六波羅蜜寺）

## 治承三年のクーデター

平清盛は、治承三年(1179)十一月十四日、数千騎の大軍を擁して福原から上洛し、八条殿に入った。いわゆる武力クーデターの勃発であるが、これにより後白河院の院政をやめさせ、孫の言仁親王(安徳天皇)を践祚させたのである。さらに院近臣の知行国を没収、代わって知行国主を平家の息のかかった者に交代させた。当然、現地を治める目代も平家の家人らが起用され、院の支配下にあった在庁官人らは抑圧を受け、既得権益を脅かされることとなる。このように清盛による平家の政権はここにきて絶頂を極めることとなる(平家の知行国は17か国から32か国に増える)。ところが一方で、この強引なクーデターが反平家の機運を一気に高めることにもなった。所領を没収された以仁王の挙兵計画もこのクーデターが直接的原因である。

頼朝はどれ位以仁王にかかわりがあったのか？




## 以仁王の令旨にまつわる謎

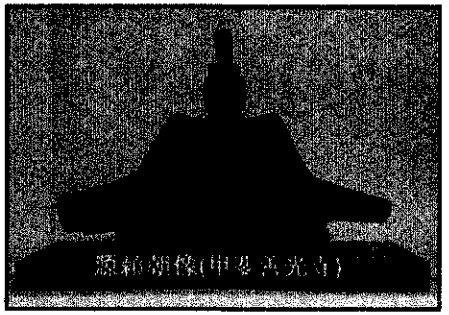
以仁王が令旨を発信した狙いは？

『平家物語』「源氏揃え」に以仁王の御所を訪ねた源三位入道頼政が「もしこの謀叛をご決心なされ、御仰せの趣旨を下したまわるならば、諸国にあまたそうろう源氏の武士どもは、喜び勇んで馳せ参ずるでありましょう」と決起を促したのである。おそらくここで言う源氏揃えとは「大きな軍勢を所有している」地方の源氏諸氏を念頭においていると考えられ、その一族に令旨を届けて挙兵を促すつもりであった。したがって、ある程度の軍勢を有しているだろう常陸佐竹氏、甲斐武田氏とその一党、木曽義仲などを当てにしていた。一方、伊豆の一介の流人頼朝は果たして王の眼中にあったのだろうか？

## 以仁王と源頼政が抱いたシナリオ

■地方の有力な源氏に平家討伐のための兵を挙げさせる(令旨伝播)
■平家がその反乱軍を討伐するため、都から各地に出撃する
■その隙をついて以仁王と頼政の一党が京都周辺で挙兵し、清盛を討ち、平家政権を打倒する

『平家物語』「源氏揃え」
【京都】出羽光基・出羽光長・出羽光重・出羽光能
【熊野】源義盛(行家)　※令旨を全国の源氏に伝えたとされる
【摂津国】多田朝実・能瀬高頼・太田頼基
【河内国】源義基(源義家の子義時の子)・義兼父子
【大和国】源有治・源清治・源成治・源義治
【近江国】山本義経・柏木義兼・錦織義高
【美濃尾張】山田重忠・浦野重直・泉重光・浦野重遠・葦敷重頼・葦敷重資・木田重長・木田重国・矢島重高・矢島重行
【甲斐国】逸見義清・逸見清光・武田信義・加賀美遠光・小笠原長清・一条忠頼・板垣兼信・武田有義・武田信光・安田義定
【信濃国】大内維義・岡田親義・平賀盛義・平賀義信・木曽義仲
【伊豆国】源頼朝
【常陸国】志田義教・佐竹正義・佐竹忠義・佐竹義宗・佐竹高義・佐竹義季
【陸奥国】源義経




**そうなると、ほとんど私兵を持たない一介の流人である頼朝に、果たして令旨は届けられたのであろうか？各地の源氏に令旨を届ける役目であった叔父、十郎行家が奥州行きの途中に甥の頼朝を訪ねたことは十分にあり得るが、流人頼朝は決して以仁王から期待されていたわけではないのである。**
**さあ、どうする頼朝？**

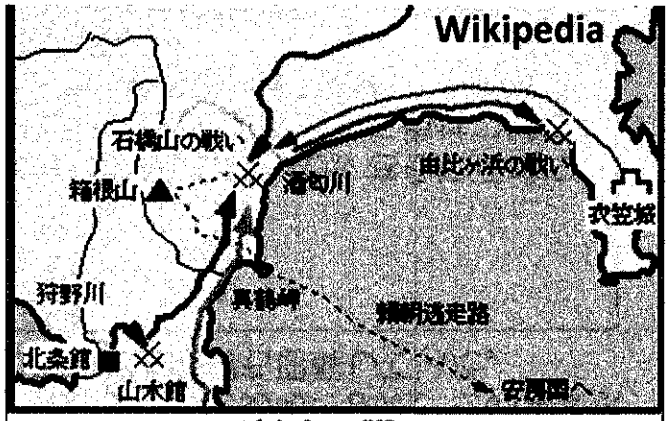
**ここで頼朝は、この以仁王の令旨を巧妙に利用したのである。加えて、後白河法皇から密命をも受けているとでっちあげたとする説もあるが、これらは十分に大義名分となり得る事柄である。いずれにせよ、十分とは言えないが、他の源氏一族が期待されたような戦える軍勢を整え、平家討伐の旗を掲げて挙兵することを決心したのである。**

**治承四年(1180)八月十七日**
頼朝の命を受けた北条時政以下の士卒は、伊豆国に於ける平氏方山木兼隆を襲うべく、北条から山木に向かう。山木は全く油断しており、加えて当日は三島社の祭礼の日で、郎党の多くは社に参拝後黄瀬川宿で宴会をしていたようである。同時に兼隆の郎党の堤権守信遠も襲い、敗死させた。目代館の警衛は一騎当千の精兵であったため苦戦はしたものの、ほどなく兼隆を討ち取った。

**北条氏はなぜ頼朝に加勢したのか？**
北条氏の所領がある伊豆国は承安二年(1172)以降、源頼政が知行国主であった。そのためか、以仁王の挙兵に伊豆武士の工藤四郎·五郎兄弟が参戦しており、頼政と在庁系武士との関係性が良好であったことが窺える。ただ、挙兵失敗により頼政が敗死したあと、平家一門である中納言平時忠が国主となり、かっての流人であった山木兼隆が目代に任命されて以降、狩野氏·北条氏は山木との軋轢が絶えなかったようであり、一方の伊東祐親は特別親密な関係を保持していた。つまり、伊豆国はそもそも在庁官人である北条氏が目代に反発する状況が出来上がっていたのであり、北条氏側からすれば、貴種頼朝を上手く担ぎ上げて、にっくき目代を討ったと言えなくもない。憶測を重ねれば、知行国主頼政と頼朝の間で平家打倒の企てがあり、その仲介役を北条時政が担っていたとも考えられる。

| | | 伊豆国知行国主 | |
|---|---|---|---|
| | | [redacted] | 平時忠<br>目代 |
| 伊豆国在庁官人 | 伊東氏 | | 良好 |
| | 北条氏 | 良好 | 反発 |
| | 狩野氏 | 良好 | 反発 |

八月二十三日
山木に勝利した頼朝は、小田原の西方に位置し箱根の山塊が相模湾になだれ落ちる断崖のある**石橋山**に三百余騎で布陣した。軍勢が一気に三百騎に増えたのは、ひとえに工藤茂光(狩野一族)が味方になったことが大きい。一方の平氏方は大庭景親、その弟俣野景久らの三千余騎と加えて後方から伊東祐親の軍が挟撃態勢に入った。この時点での頼朝軍主力は、北条時政･工藤茂光･土肥実平などであった。二十三日、敵味方が入り混じって戦ったが、頼朝軍は多勢に無勢で壊滅した。主要な郎党らは四散し、頼朝･北条時政らは石橋山の背後にある山中に逃げ込み、木のほこらに隠れた。その時、平氏方大庭方の梶原景時に見つかったが、景時は頼朝を見逃したのである。この戦いで、北条宗時･工藤茂光は伊東祐親軍に包囲され討死した。



石橋山の戦い
(1180年)
源氏方　平家方
頼朝軍　三浦軍　大庭軍　伊東軍

**石橋山合戦で大敗を喫してしまった！さあどうする頼朝？？**

**八月二十九日、土肥実平の案内で真鶴岬から安房へ渡海、平北郡猟島に上陸**
二十六日頼朝は、土肥実平と共に真鶴岬から小船で安房に向かい二十九日安房の猟島(かがりじま)に上陸、九月一日には安房国内の安西景益に以仁王の令旨を伝え、在庁官人らを率いて参陣するよう命じているが、ここでも令旨をひけらかして上手く活用している。ただ、『山槐記』には、頼朝軍が国府の倉庫を襲撃して財物を奪ったと記している。この行動だけを見れば国家に対する反逆と言われても仕方なく、後白河院の命を受けての挙兵と公言していることには無理がある。その後精鋭三百騎を従え、上総から鎌倉に向かった。九月三日、長狭常伴の襲撃を受けるが、三浦義澄が事前に察知し、迎え撃って勝利する。これにより長年敵対関係が続いていた三浦氏と長狭氏の抗争にも、頼朝の安房上陸によって決着がついたと言っていい。

**九月十三日、上総に向かう(兵は三百)**
上総広常の合流を待たずして下総へ進軍を開始する。但し、なかなか腰を挙げない上総広常を無視したわけではなく、そのあたりは既に打合せ済みであったと考えられる。
**九月十七日、下総国府に千葉介常胤が参向**
常胤の参陣理由を推測すると、挙兵してすぐに下総目代を攻撃し、次いで藤原親政を討っていることから、この時期、平家方である下総藤原氏に圧迫を受けていたと思われる。親政は皇嘉門院判官代であると同時に下総千田荘の経営者でもあった。こうしてみると、常胤の軍事行動は決して頼朝の挙兵に馳せ参じたと言う行動であるとも思えない。

**千葉常胤が頼朝に従属した理由**
常胤は広常の決起を見て呼応したとみられるが、こちらも当時は下総藤原氏と敵対関係にあった。この藤原氏は京都と地方に基盤を持ち、千田荘を経営していたが以前より相馬御厨の支配を巡って千葉氏と対立していた。常胤が挙兵して真っ先に行ったことが、この藤原親政への攻撃であり、このことから常胤も広常同様、平家方の下総国衙および目代との争いを、頼朝の名声を利用して有利の事を運び、勝利したと言っていい。ただ、常胤自身は頼朝の父義朝も相馬御厨への侵略者と見ていた。

**九月十九日、上総広常、二万の軍勢を引き連れて合流**
通説とは異なるが、広常は決して遅参したわけではない。頼朝の安房上陸を契機に一族内の内訌を解決し、上総国の平氏方の軍を制圧していたとされ、それにより遅れることは連絡済みであったと言う説もある。『玉葉』九月十一日条に、頼朝は介八郎広常を味方につけたとの記述がある。

**上総介広常が頼朝に従属した理由**
広常は同族内での家督争いに勝利したが、平家家人である伊藤忠清が上総介となるとこれと対立することとなる。忠清は広常の在庁所職を奪取するため、一族の平重国を派遣する。その重国が九月『源氏方』に討たれたとの記述がある(『高山寺明恵上人行状』明恵は重国の子)。この源氏方が頼朝であれば『吾妻鏡』に記述が無いのはおかしい。おそらく頼朝への参陣を公表していた広常に敗れたと想定した方が現実的である。すなわち、ここでは広常こそが貴種頼朝の名を利用し、広く徴兵して平家目代との争いを制したと言っていい。したがって、広常が頼朝の品定めをしていたなどの説はあり得ない。当時の上総はそのような平穏な状況ではなかったのである。おそらく広常は忠清から圧迫を受けており、いつか反撃しようとそのチャンスを狙っていたところに幸運にも頼朝がやってきた。そして頼朝の貴種・権威・以仁王の令旨を最大限に活用し、その勢いで平家方に勝利したとしても不思議ではない。

**十月十六日、頼朝は富士川に向けて出陣したが、甲斐源氏援護の為と考えられる。**
十七日、相模の波多野を討つべく進軍したが、波多野義常は戦わず自害。大庭景親も平家追討軍に合流すべく駿河に向かおうとしたが、頼朝軍に阻まれた。景親は、富士川合戦後に頼朝に降伏するも、許されるはずもなく処刑、伊東祐親も捕らわれ、その後自害したと言われる。十八日黄瀬川宿に到着した頼朝軍であったが、富士川合戦は事実上、甲斐源氏と平家との戦いであった。頼朝軍は最後まで傍観に徹していたわけであるが、これまで御家人に約束していた新しい領地を何ひとつ得ることは出来なかった。

## さあ、どうする頼朝？

**十月二十三日、黄瀬川宿から戻った頼朝は初めて論功行賞を行なった。**
**■本領安堵(既存の権利を保障)**
**■新恩給与(新たな土地・権利と付与)**
しかし、この時点ではこのような権限行使の権力的根拠はは全くない。しかもまだ合戦の最中であり、行賞の内容はその原資が平家方の武士から没収した所領であった事は非常に興味深い。富士川の合戦の結果として導かれることは、頼朝はいわば傍観者であって、所領的には駿河国・遠江国など甲斐源氏にいいように運ばれ、頼朝側の得るものは全くなかったという事が大きい。したがって、頼朝は新たな所領を求めてその軍を解体することなく、常陸国佐竹攻めに向かうしかなかったのである。また、このまま京へ攻め上るという選択肢も上総広常らに言われるまでもなく、この時点では非現実的なことであると頼朝も理解していた。

**寿永二年(1183)十月宣旨　→**
**「東国における荘園・公領の領有権を旧来の荘園領主・国衙へ回復させることを命じる」**
**「その回復を実現するため源頼朝の東国行政権を承認する」**
宣旨の発布と同時に、頼朝は配流前の官位である従五位下右兵衛権佐に叙せられ、謀叛人の立場から脱却した。さらに正式に広範な地域に影響力を持つことができるようになったのである。しかし、これは三年前に令旨とともに東国武士に見せつけた権力なのであった。実はこの三年間、頼朝にはそのような権力が依拠するものは何もなかったのである。すなわち、東国武士をペテンにかけていたのである。なかなか発布されない宣旨に正直びくびくしていたと思われる。

**二十七日、軍勢を引き連れ佐竹氏のいる常陸に向かって出発し、十一月四日頼朝は常陸国府に入る。**
通説では、富士川の戦いに勝利した頼朝は敗走する平家を追撃すべしと命じたが、上総広常・千葉常胤・三浦義澄らが、後顧の憂いである佐竹氏を討つべきと主張した事になっている。しかし、甲斐源氏の活躍により何も得るものが無かった頼朝にとって、約束の恩賞の土地を付与するためには、鎌倉の背後をつかまれている佐竹氏を打倒し、その所領を得るしかない。それが佐竹征伐の本当の理由である。決して頼朝が広常らの意見具申に影響されたわけではない。合戦の経緯は、上総広常が縁者である佐竹家の嫡男義政(忠義)を矢立橋に誘い出し誅殺した。この動きを見て動揺した佐竹氏の中には頼朝方に寝返ったり逃亡する者も出てきた。結局、広常の献策により、金砂城には入城していなかった一族佐竹義季に主家を裏切らせて頼朝軍に加わって金砂城を攻撃させた。城を守っていた佐竹秀義は奥州(または常陸奥郡)の花園城へと逃亡し、頼朝軍は同城を焼き払い、佐竹氏の領土を没収して部下の論功行賞に充てた。

**武力的実績のない頼朝にとって、レジティマシー(正統な血筋)こそが唯一のよりどころである！**
**その上で、多くの坂東武士を結集し、貴種である頼朝を中心とした新たな秩序を構築する必要がある！**
**しかし、自分と同じレジティマシーを受け継ぐ者(特に鎮守府将軍を出した系統)が坂東にはまだいる**

## どうする頼朝？

**■自分と同等の正統な血筋を有する坂東武士には消えてもらう！実の弟も例外ではない！**
頼朝が鎌倉に居を構えて以降、理不尽に粛清された坂東武士達には共通項がある。すなわち、正統な血筋(過去に**鎮守府将軍**を歴任しているなど)と考えられる一族の棟梁であるということである。

**◎坂東に下った桓武平氏の正嫡　上総広常**　*(鎮守府将軍の系統*
→間違いなく坂東平氏(桓武平氏良文流)の嫡流と思えるのが上総氏である。直前に棟梁となった広常もいわゆる貴種として抬頭する可能性は十分あると考え、早めに粛清した。かわりに庶流であった千葉氏を徴用し、族滅することを回避した。

**◎桓武平氏嫡流貞盛弟繁盛の正嫡　多気義幹**　*(常陸大掾氏嫡流*
→もともと桓武平氏(国香流)の嫡流であり、系譜的には一番信憑性のある氏族。平将門の乱を平定した鎮守府将軍貞盛を始祖としており、こちらも貴種といっても過言ではない。常陸国一帯に広く盤踞しており、将来的に障害となる可能性があった。

**◎藤原秀郷流坂東武士の正嫡　足利俊綱**　*鎮守府将軍の系統*
→平将門の乱以降、坂東武士の中心的武士団になりつつあった秀郷流藤原氏。この嫡流なのが藤姓足利氏であり、その棟梁が足利俊綱である。頼朝は志田義広の蜂起に同意した俊綱をその機会に粛清。かわりに庶流の小山氏に秀郷流の正統性を付与した。

**◎八幡太郎義家(河内源氏)の正嫡と考えられる　木曽義仲**　*源氏一族では初の征夷大将軍*
→義仲は、頼朝の父義朝に代わって河内源氏の嫡流となった義賢の嫡子であるがゆえに、頼朝が河内源氏正嫡性を訴える上で完全に障害となる。したがって、当初から敵対しており、ついには追討する結果となった。

**◎八幡太郎義家と同等の血筋と見られていた新羅三郎義光の後裔　佐竹忠義、一条忠頼、安田義定**
→義光は一時期、兄義家に代わって鎌倉の地を治めていた事実があり、その関係から義光流源氏は坂東では一目置かれていた一統ではある。この義光流の常陸源氏佐竹氏、甲斐源氏武田氏は武門源氏としてもこちらも正統性を有している。その点、頼朝は見過ごすことはしなかった

**曽我兄弟の仇討事件の裏には何があったのか？**

建久４年(1193)五月、頼朝は富士裾野の巻狩りを催すが、二十八日夜半に事件が起こった。巻狩りの最中に曽我兄弟(十郎祐成と五郎時致)が親の仇である工藤祐経を討ったのである。しかしその後、弟の時致は頼朝の寝所を襲おうとしたため、近習に捕縛された。『保暦間記』はこの混乱のなか、富士の狩場で頼朝が討たれたと言う誤報が鎌倉に届き、留守をしていた範頼が政子を慰めて「範頼左テ候ヘハ御代何事カ候ヘキ」と言ったことが鎌倉殿の懸念を招いたことを記している。頼朝は、何か大きな力が自分を抹殺する動きがあると考え始めた。

**さあ、どうする頼朝？**

曽我兄弟の仇討の後、立て続けに御家人の粛清を断行する。問題のあった久慈の輩･多気･小栗･下妻はすべて常陸の豪族であり、常陸を管轄下にしていた範頼とは無縁ではない。また、曽我兄弟の異母兄である原小次郎は範頼の従者であり、岡崎義実や大庭景義は範頼と西海遠征で行動を共にした縁がある。すなわち、仇討事件後に本人含め粛清された面々はいわゆる範頼一派と言っても過言ではない武士団なのである。

| 建久四年(1193)曽我兄弟の仇討事件と粛清事件 | |
|---|---|
| 6月3日 | 常陸久慈の輩、曽我兄弟の事件で狩場より逐電する |
| 6月22日 | 多気義幹、城に立て籠る |
| 7月2日 | 小栗重成、誅殺により所領没収後も幽閉先に病死 |
| 8月17日 | 源範頼、謀反の疑いで伊豆へ下向させられる |
| 8月20日 | 大庭景義、剃髪後、出家して鎌倉を追放される |
| 11月28日 | 安田義資、女事により誅殺される |
| 12月13日 | 下妻広幹、北条時政に謀反ありとして誅される |

ひょっとして、これらの一派が範頼を掲げて、仇討にかこつけて頼朝を暗殺しようと企んだのかもしれない。少なくとも頼朝はそう思った。範頼本人が加担していたかは不明であるが、この常陸の輩の調整役として対処しきれなかった責任を問われ、失脚したとも考えられる。いずれにしろ、範頼が同年八月十七日伊豆国修禅寺に幽閉されたことは事実であり『吾妻鏡』はその後の範頼の消息を記さない。一方『保暦間記』『北條九代記』などによるとほどなくして誅殺されたというが、この範頼誅殺を裏付ける他の一次史料はない。因みに、これら連続粛清事件の中で異色なのは、甲斐源氏安田義資の梟首である。実は三河守である範頼と義資の父遠江守安田義定は連携していたことが疑われており、或いはないにしても頼朝がそう思い込んだ可能性は十分ある。果たして安田父子が頼朝打倒までも企てていたのか不明であるが、仇討事件の余波を受けて安田一族が粛清を受け、滅亡してしまったことは事実である。頼朝は仇討事件にかこつけて、**“不満分子在庫一掃セール”**を行ったと言ってもいい。


**参考書籍**

野口実『中世東国武士団の研究』『武家の棟梁源氏はなぜ滅んだのか』『源氏と関東武士』『武門源氏の血脈』
細川重男『頼朝の武士団』『北条氏と鎌倉幕府』、御座勇一『頼朝と義時』、川合康『源頼朝』、永井晋『源頼政と木曽義仲』
坂井孝一『鎌倉殿と執権北条氏』、石丸熙『都市鎌倉の武士たち』、秋山敬『甲斐源氏の勃興と展開』
湯山学『鎌倉武士一 鎌倉党』『鎌倉武士二 三浦党』、金澤正大『鎌倉幕府成立期の東国武士団』
野口実編『治承～文治の内乱から鎌倉幕府成立』、高橋修編『実像の中世武士団』